



イワクラツアーin飛鳥

2009年5月30日 晴れ

前日まで雲行きが怪しくやきもきしたが、幸い晴天。自転車と徒步でめぐる飛鳥の旅の始まりである。

渡辺会長の飛鳥は蘇我氏がゾロアスターの聖都として造営されたものだという話から持ち上がりた今回のツアーである。参加者18名、そのうち自転車で回るAコースの人は14名、徒步でめぐるBコースの人は4名である。Aコースのメンバーは岡寺9時30分の集合である。遠く岡山や千葉の人も遅れる人は一人もなく集合。

自転車を借りて、まずは「益田の岩船」に向かった。緩やかな登りであったが、全員元気に岩船の

ある小山の下に到着。そこから徒步で約10分、巨大な岩船に全員息を呑んだ。頂部にある四角い切れ込みを確認する者、周りを撫で回すもの、離れて全貌を視界に入れようとする者、さまざまである。ここで、岩船とゾロアスターの聖方位20度の方向にいくつかの神社が直列していることなどを説明。

このあと、自転車で欽名天皇陵に向かい、そこで徒步参加のメンバーと合流。吉備姫王墓の墓域にある猿石を見学。

そこからは、全員で「鬼雪隠」、「鬼の俎板」、「亀石」を見学、その後橘寺に寄り、境内にある「三光石」「二面石」見学。ここで、会長より二面石がゾロアスターの教義、善、惡の二面をあらわしており、飛鳥がゾロアスターの都であるひとつの証拠と説明された。

次いで、フグリ山イワクラである。飛鳥川沿いの遊歩道を進み登山口に到着。急な階段をあえぎあえぎ登つたその先にイワクラがあつた。イワクラの傍らで想い想いに場所を定め、昼食である。心地よい風が頬をなで、なんともいえない心地よさである。

イワクラの少し東の展望台からは飛鳥の全貌が見渡せる。逆に言うと、飛鳥の都からこのフグリ山イワクラが見えるということであり、この山が飛鳥の聖山であると言ふ事がわかる。このイワクラからゾロアスターの聖方位線を描くと、やはり神社やイワクラが直線状に並んでいるのが読み取れる。

このあと、「石舞台古墳」に向かう。ここで、徒歩のメンバーと合流。石舞台古墳は、何度か来てゐるが、いつ見てもその雄大さには感激である。会報15号でヒューゴ・ジエンクス氏の石舞台の表面に描かれた画像を見ようと目を凝らしたが、残念ながらよく見えなかつた。

ここで突然の雨。相変わらずイワクラ(盤座)学会のツアーには雨がつき物だと嘆いたが、幸いすぐ止んだ。

そこより北に約5分程度で「飛鳥坐神社」に到着。境内のいたると上り坂である。みんな黙々と行き進。岡寺横の治田神社の結界石の福石を見た後、「岡の立石」に向かう。幅50cmほどの狭い道を登り尾根路に到着。そこからは約100mで立石に到着である。高

の立石は飛鳥の東の結界を示すものといわれているが、高さ2m弱の小さな立石である。

岡の立石から北に10分程度で有名な「酒舟石」に到着。いつ見ても不思議な石造物で、何のためのものかといろんな議論が出てくる。そのすぐ下に最近発見された「亀型石造物」があり。斎明天皇の庭園の遺跡といわれている。この石造物と関連させて、その上部にある酒舟石もその庭園構の一部ではないかという説もあるようである。

「豊浦の立石」は高さ2mほどの中平たい立石である。この石は飛鳥の北・西の結界を示していると言われている。

以上、延々7時間の強行軍であったが、誰一人脱落するものもなく、無事全程を終えることが出来た。

ここで次回の再会を約して解散した。

2m程度の立石であり、後の人があれを刻んだものとおもわれる。「弥勒」は「ミトラ」であり、ゾロアスター教との係わりが見て取れる。

ここから、また徒歩メンバーと自転車メンバーは別れ、自転車メンバーのみ「弥勒石」を見に行く。飛鳥川沿いにあるそれは高さ

ゾロアスター教聖方位について

聖方位その□

飛鳥においてゾロアスター教の聖方位をみると、3本の聖方位と2本の東20度の聖方位が見受けられる。それぞれの基点は、東から上居の立石とフグリ山の磐座、そして益田の岩船である。

聖方位その1

上居の立石を基点とする聖方位である。北に向かつて順に岡の立石—飛鳥坐神社—香具山の岩戸神社—頂上の国常立神社、そして、若干ずれるが香具山神社と畝尾都多本神社が聖方位に位置している。上記の神社のうち、飛鳥坐神社、香具山の岩戸神社、香具山の神社は、小ぶりであるが磐座をご神体としている。

聖方位その2

フグリ山の磐座を基点とする聖方位である。北に向かつて順にフグリ山磐座—弥勒石—甘樺丘山頂—甘樺坐神社—藤原京大極殿跡が聖方位に位置している。

聖方位その□

益田の岩船を基点とする東20度の聖方位である。その先端は耳成山の東の山腹の耳成山口神社を指し示しているようである。

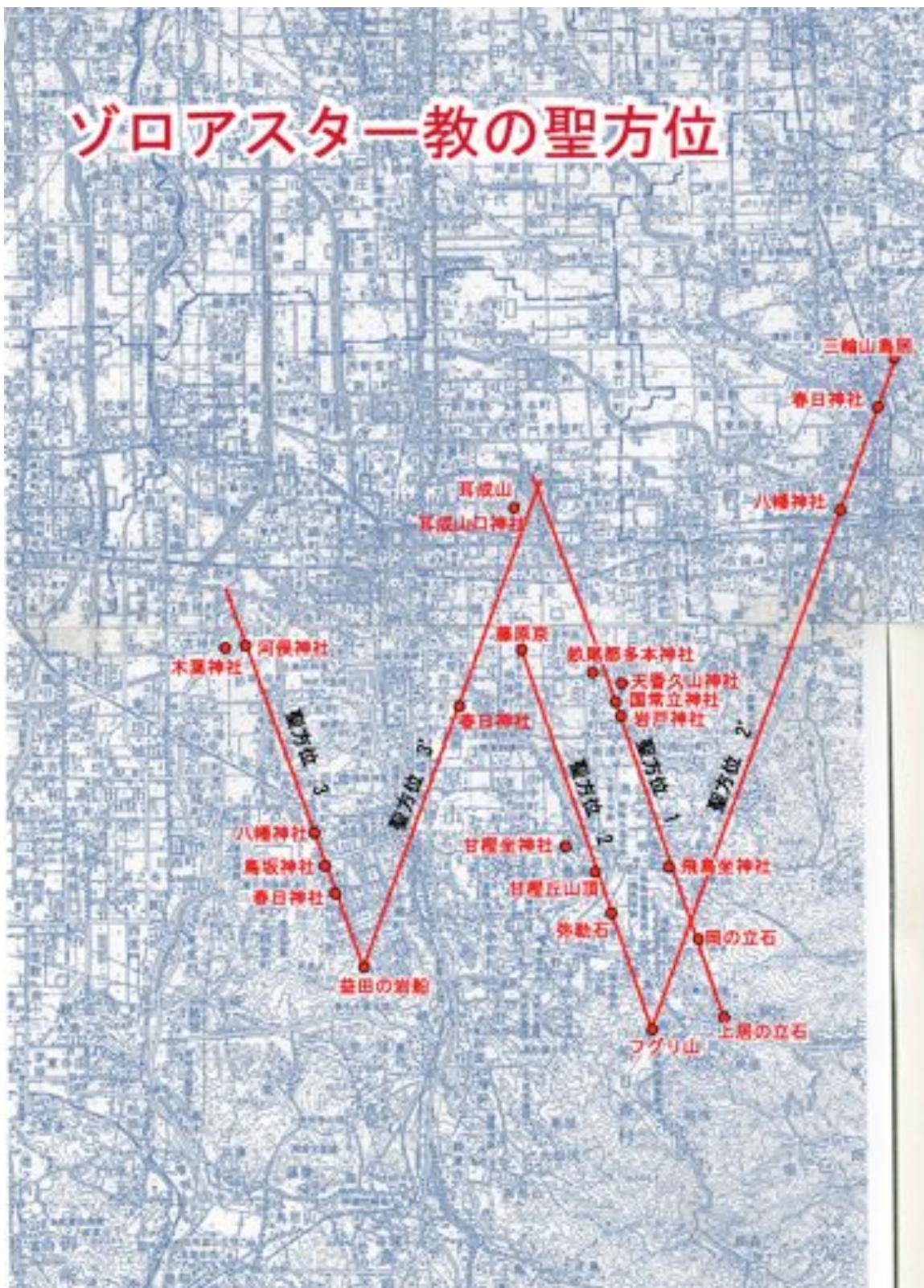
聖方位その3

益田の岩船を基点とする聖方位である。北に向かつて益田の岩船—春日神社—鳥坂神社—八幡神社—河俣神社が聖方位に位置している。それぞれの神社のご神体に磐座があるかどうかは確かめていないが、ゾロアスター教と秦氏の繫がりを指し示しているのかもしれない。



フグリ山(ミハ山)からの遠望(遠くに耳成山、手前に甘樺の丘)

ゾロアスター教の聖方位



一飛鳥の石造物一

益田岩船



この石造物は、東西の長さ11m、南北8m、高さ（北側面）4.7mの台形を呈し、頂上部と東西の両側面に幅1.8m、深さ0.4mの浅い溝状の切り込みを設けている。

頂上部ではこの溝内に間隔をおいて東西に二つの方形の孔が穿たれている。孔は東西1.6m、南北1.6m、深さ1.3mと東西ほぼ等しく、孔の底部のまわりには幅6cmの浅い溝をめぐらす。石の加工は上半部が平滑に仕上げら

れているが、下半部は荒削りのままで格子状の整形痕がみられる。用途は明らかでないが、上半部平坦面の溝や孔が高麗尺（こまじやく）で計画され、花崗岩の加工技術が終末期の古墳と共通するなど、すくなくとも七世紀代の特色をもち、飛鳥地方に分布する特異な石造物の中でも最大のものである。

岩船の用途は不明であるが、『ウイキペディア』によれば、次の説がある。

1. 益田池の造築を讃えた、弘法大師の書による巨大な石碑の台石

最も古くからある説で、上のついていた碑は高取城築造のさいに石垣をつくるための用材として破碎されたという伝説がある。

2. 占星術のための天体観測台

二つの穴に石柱を建て、その上に横柱を渡して星を観測したとばれている。



（檜原市教育委員会の説明板より）

岩船は貝吹山（かいぶきやま）の連峰である石船山（いわふねやま）の頂上近くに所在する花崗岩の巨大きな石造物で、俗に益田岩船とよばれている。

いう説。

3. 火葬墳墓

穴の中に遺骨を入れて石の蓋をするという説。

4. 横口式石槨（せつかく）の古墳

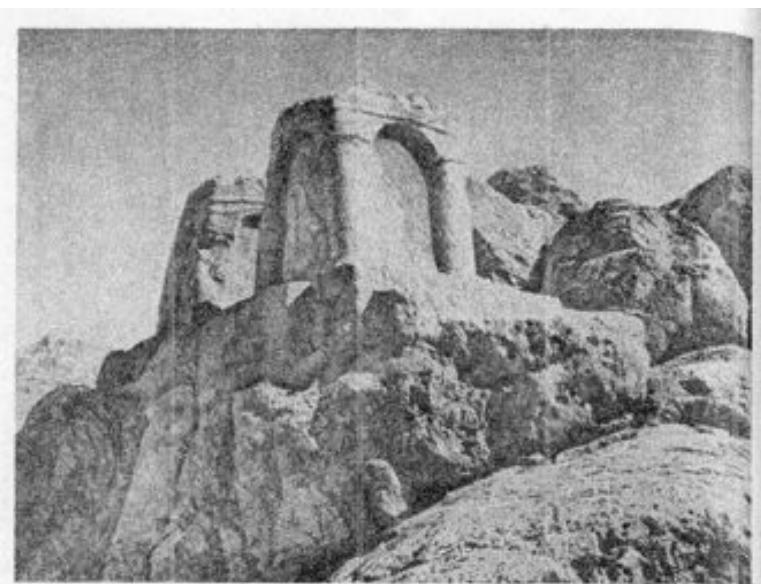
横口式石槨の建造途中で石にひびが入っていることが分り放棄されという説。

その後別の石を使って完成したものが、岩船から南西へ500メートルほど行ったところにある牽牛子（けんごし）塚古墳であるといふ。東側の穴と違つて、西側の穴には水がたまらない事からも亀裂が入つてゐる事がわかる。現在では最も有力視されている説だが、決定的な証拠は無い。

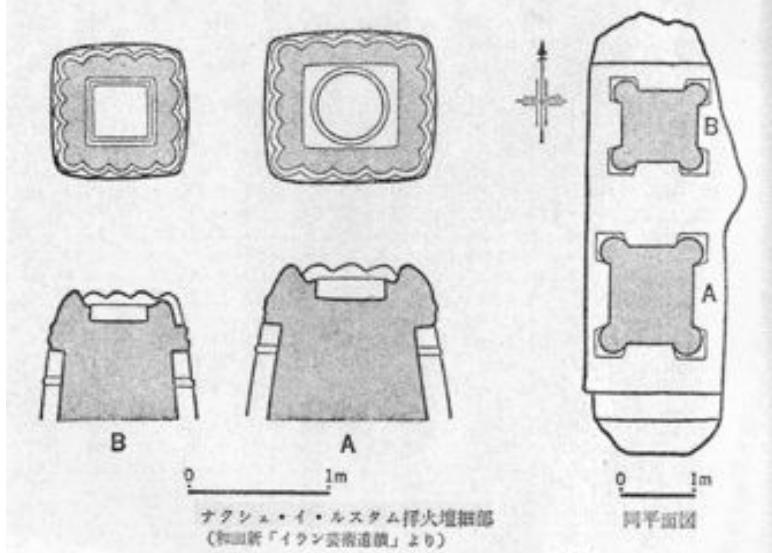
5. 松本清張の「火の路」より抜粋

岩船の台上には東西に二つの方形の穴がならんでいる。このような石造物は今のところ朝鮮にもな

く、中国にもない。日本独特のものといえる。これを墓とする説は知らない。古墳であれば、封土のあとがなければならないが、それがないからである。また、占星台説は天武紀に依拠した出典もあって魅力的であるが、占星台としては南、東、西が山や、丘陵地にさえぎられ、観測の条件としていかかと思う。天文台であれば、四



ナクシ・イ・ルスタム《拝火壇》（ロマン・ギルシュマン「古代イランの美術」新潮社版より）



ナクシ・イ・ルスタム拝火壇細部
(和田新「イラン芸術遺跡」より)

をなす岩をそのままくり抜き造

具山の頂上が適切な気がする。この石の基壇上に並ぶ二つの方形穴を見ていると、筆者の連想は東アジアを通り越してイランのナクシ・イ・ルスタムやパサルガダエにあるゾロアスター教の拝火壇に結ぶのである。

パサルガダエのゾロアスター教の拝火壇は、単石からなる立方体の拝火壇は、单石からなる立方体の拝火壇（3、4世紀）は、岩山の麓状をなし、別個の石で作られた八段の階段がこれにつけられている。上部は平面で火を焚く方形穴の施設はない。

ナクシ・イ・ルスタムにある拝火壇（3、4世紀）は、岩山の麓と1.55mで、方形の幅は上に狭く、下にやや広がっている。伊朗に残る二つのゾロアスター教の拝火壇から筆者（松本清張）は、思い切った仮説を提出する。

結論から言えば、益田の岩船の上部の二つの方形穴は、拝火壇の火を燃やす用途であると推測する。つまり、岩船全体がゾロアスター教の拝火壇と基壇を兼ねた石造物だと考えるのである。

られている。それぞれ1.76mと1.55mで、方形の幅は上に狭く、下にやや広がっている。

伊朗に残る二つのゾロアスター教の拝火壇から筆者（松本清張）は、思い切った仮説を提出する。

猿石

欽明天皇陵の側にある吉備姫王墓（きびひめのみこのはか）の墓域にある。江戸時代に欽明天皇陵の南側の字イケダの水田から掘り出された高さ1mの4体の石造物である。

それぞれ、「女」、「山王権現」、「僧」、「男」の名前が付けられている。



鬼の雪隠・俎

畑の中を通る遊歩道の脇の高台には「鬼の俎」が、遊歩道を挟んだ高台の麓に「鬼の雪隠」がある。両者は直線距離にして数十メートル離れているが、元は一つの古墳の石室だったものが、盛土が無くなつたうえ、二つに分かれてしまつたものである。元々は繰り抜かれた横口式石槨の石室（鬼の雪隠）とその底石（鬼の俎）であった。



鬼の俎板



鬼の雪隠

亀石

（明日香村飛鳥保存財団の説明板より）

亀石と呼ばれる石造物は、いつ何の目的で作られたかは明らかでないが、川原寺の四至（しき…所領の四方の境界）を示す標石ではないかという説がある。

亀石の伝説の中で、大和盆地が、昔、湖であったという話は、地理学や考古学の見地から事実と推定されている。



亀石の伝説<明日香村飛鳥保存財団の説明板より>

むかし、大和が湖であったころ、湖の対岸の当麻と、ここ川原の間にけんかが起った。長いけんかのすえ、湖の水を当麻にとられてしまった。湖に住んでいたたくさんの亀は死んでしまった。何年か後に亀をあわれに思った村人達は、亀の形を石に刻んで供養したそうである。

今、亀は南西を向いているが、もし西に向き当麻をにらみつけたとき、大和盆地は泥沼になるという。

二面石・三光石（橘寺境内）

二面石は橘寺の境内の本堂左手にある。

石の両側面に人の顔を掘つたもので、右善面、左悪面と呼ばれ、人の心の持ち方を現したものといわれている。飛鳥時代の石造物の一つとされる。

三光石は橘寺護摩堂近くにある。聖徳太子勝鬘經ご講説の時、日、月、星の光を放つたといわれる。

橘寺

太子建立の7寺の一つで、正式には仏頭山上宮院菩提寺といい、橘樹寺、橘尼寺とも称する。現在の寺地には、東面する四天王寺式伽藍配置の跡が残っている。しかし、橘寺の存在を示す最も古い文献は『日本書紀』で、680年（天武9）に橘尼寺で出火し10坊を失つたことが記録されている。この寺から出土する瓦は7世紀後半のものが多いため、7世紀前半に使

われたとされる素弁蓮華門軒丸瓦も発見されていて、創建はその頃まで遡ると考えられている。

聖徳太子出生の地

寺伝では、橘寺は聖徳太子（＝厩戸皇子）出生の地と伝える。出生地とされる伝承では、この地に欽明天皇の別宮があり、太子は574年（敏達3）にここで誕生したと言われている。



二面石



三光石

石舞台古墳

飛鳥ではあまりに有名な観光スポットである。被葬者は、古代この地で最大の勢力を誇っていた大豪族の蘇我馬子であるとの説が最も有力視されている。

（奈良県教育委員会説明板より）

この古墳は、封土（もりつち）の上部がなくなり、玄室部の天井石と側壁の上方が露出していて、天井石が平たいので、古くから石舞台古墳の名で親しまれている。

玄室の長さは、約7・6m、幅約3・5m、羨道の長さは約1・1・5m、幅2・2mで、玄室底部から羨道中央部を南に通る排水溝がある。

現在封土基部は方形で、外斜面に自然石の貼石がある。一边の長さは約5・5m、その外方のからぼりの幅は底部で約6・7・6mで、北方の幅は約6・5mである。その外側に上幅約5mの外堤があり、



石舞台古墳遠望

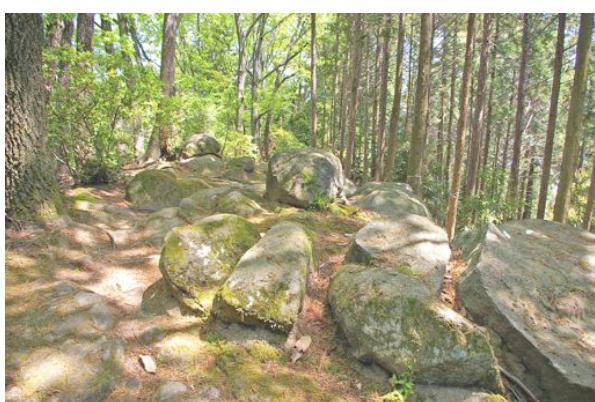


石舞台古墳羨道

内外斜面にも下方部と同じく貼石をする。封土は、方形・上円下方形とも考えられているが、巨きりしないが、巨大な石材を架構した雄大さは、日本古墳の中でも群を抜いた後期古墳で

山山頂にある磐座。山頂からの飛鳥展望 遠くに耳成山や香具山が見えます。

この磐座のある山は、ミハ山またはフグリ山と呼ばれています。飛鳥の神奈備山の所在地については、従来さまざまな論議がされてきたのですが、このミハ山とする説が有力なようです。



フグリ山のイワクラ

国営歴史公園祝戸地区のフグリ山山頂にある磐座。山頂からの飛鳥展望 遠くに耳成山や香具山が見えます。

マラ石

マラ石は、地表から斜めに突き出た男性の陰茎に似た石である。佛教考古学者の石田茂作によりマラ石と命名された。宮域を示すための標石、橋脚として利用されたなどの説が出されているが確かな用途は不明である。



上居の立石（じょうじのたていし）

この立石は、長方形の花崗岩で、南を正面としている。高さ1.9m、幅1.7m、奥行きは下が1m、上は0.3mほどで、加工痕跡はない。



治田神社 福石

岡の立石

岡寺の北尾根に位置する鳥帽子の形をした2m程度の立石です。飛鳥の聖域を区切る結界石のひとつではないかといわれています。岡寺に隣接する治田神社の境内に高さ1m程度の福石が一対立っています。



岡の立石



治田神社 福石



酒船石



亀型石造物

酒船石・亀型石造物

〈明日香村飛鳥保存財団の説明板より〉

この石造物は、現状では長さ5.5m、幅2・3m、厚さ約1mで花崗岩で出来ている。北側及び南側の一部は欠損しており、近世にどこかへ運び出されたものと考えられ、石割りの工具跡がのこっている。石の上面に、円や橢円の浅いくぼみを造って、これを細い溝で結んでいる。酒をしぼる槽とも、

酒船石のすぐ北側に7世紀中頃齊明天皇の庭園遺構とも言われる亀型石造物がある。この場所は東西に張り出した尾根に挟まれた閉鎖性の高い人工的な空間を創り出

しています。何らかの祭祀が行われたことが示唆されます。

飛鳥坐神社（あすかにいます）

この神社の元の鎮座地の候補が、前述のマラ石のある祝戸のフグリ山一帯であることは興味深い。境内は、数え切れないほどのリンガとヨナで一杯である。

お田植神事「お田植祭（おんだまつり）」には夫婦和合の所作があり、奇祭として知られている。
→ <http://www.7kamado.net/asukani.html> より)

飛鳥坐神社は式内社で、平安時代、甘南備山から鳥形山に移座されたことになっているが、従来甘南備山（飛鳥神奈備）がどこにあつたのかは不明である。一説に飛鳥の神奈備は豊浦山一帯（現甘櫻丘）、雷丘、あるいは橘寺南方のフグリ山一帯と見る説や、また現飛鳥坐神社のある場所が飛鳥神奈備で

あり鳥形山であって、移座ではないとする説などがある。

祭神は天之事代主命、高皇產靈命、飛鳥甘南備三日女神、大物主命の四柱の神であるが、古くは賀夜奈留美命が祭祀されていたとも言われる。



弥勒石

飛鳥寺の南西の飛鳥川の東岸にあり、地蔵菩薩を思わせる形状をしている。高さ約2メートル、幅約1メートル。条里制の標石とも言われるが確かな用途は不明である。この石を拌むと下半身の病気が治るという伝説があり、現在は石を被う祠が建てられ信仰の対象とな



つている。顔の様子は定かではないが、猿石と共にしたものを感じさせる。



甘檻坐神社・豊浦寺跡

蘇我蝦夷、入鹿親子の邸宅があつたといわれる甘檻の丘の北側に位置する甘檻坐神社の立石は2m程度の平板な形をした立石です。これも、飛鳥の聖地を区切る結界石ではないかといわれている。



弥勒石横の足の疲れを癒す願い石



豊浦寺跡陰石



甘檻坐神社立石

(＊石造物の説明文は、江頭務氏のホームページより借用しました）